cover story

キミの声を聞いた　キミを写したあの時間

何をしているのか、どこから
来たのかはよくわからないけど、
そこで会うから楽しかった相手。
みんなここが居場所って感じで。
どんなタイプでもわりと大丈夫
だし、打解けられるの。
おもちゃみたいな制服の
スカート、紺ソに履き替えて。
女子高校生に成りきってた。」

まりなは海外での生活が
長かったこともあり、
日本の女子高校生を楽しんで
みたかった。

「制服脱いだ時、
なんか終わった感じがした笑。
あの頃は楽しかったって思う。
今が最高ってわけでもないけど、
別に無理して先に進まなくても
いいかな」

自然体の生き方ができる
まりなにぴったりな言葉。
いつも「今」を生きる20歳の
まりなのこれからがとても
楽しみだ。

○NANA_2016.2.5@Shibuya
初めて会った時、
幼さを残した少女だった。

時間や人がNANAを
大人にしようとした。
信じられる「誰か」を
いつも探していた。
居場所がほしかった。
メールを何回かした頃、
NANAが打ち明けた。

「もう嘘つく必要ないと
思ったからほんとのこと言う。
あたし"りな"なんて
名前じゃない。
ほんとの名前は"NANA"。
りなは知らない人につく名前。
ほんとごめんなさい。
最初、信じて良いか
わかんなかったから
ほんとの名前言えなかった…」

居場所を探していた。
NANAがいてもいい場所。
「いい子」じゃなくても
笑ってくれる人。
帰れる場所と、
捨てられない関係と、
静かに流れる時間を。

大人になるには
何が必要なんだろう。
NANAがそれを手にするのは
いつの日か。

どんな形でもいい。
見守っていけたらいいな。

○madoka_2014.11.22
自分の「居場所」を
今もまだ模索中だと、
まどかは言う。

「一人で考え込みがちだし、
死にたいとか消えたいって思う
頻度が高い方だと思う」とも。

出会いは不思議だ。
まどかとも出会うべくして
出会ったと私は思う。
きっと今だから、
まどかと出会えた。

VOICESで聞いている
女の子たちも同じ。
痛みを共有して、
誰かの言葉から自分の視野が
広がって、
選択肢が増えて、
生きる力に繋がっていく。

答えはすぐに出せなくても、
プラスへ向かっていると
信じたい。

まどかは自分が一番
しんどかった
「中高時代にそういう人と
繋がっていれば、今の自分は
少し違ったかなって」と、
思うときがあると言う。

だからこそ今、
自分がその誰かになって、
応援したいとも思っている。

光の射す方へ、
まどかは進んでいく。

○marina_2015.1.4
「懐かしいなぁー。」
まりなが呟いた。
10代の頃の門限は21時。
門限を守らなければ
もっと厳しくなるし、
帰りを待つ家族が心配すること
もわかっていたので守った。
まるでシンデレラのように、
20時を過ぎると渋谷のセンター
街を後にした高校3年生時代。

「センター街には『渋メン』が
いて。渋谷に行けば会える子。

5年前、
しょうこと出会った夜のことを、
昨日のように覚えている。
彼女が時折、見せる、
消え入りそうな儚さと、
その美しい表情に、
胸がギュッと締め付けられた
ことも。

時間が必要だった。

彼女の、
その儚さの意味を知るまでには。
今だから言える、
しょうこが感じている気持ち。

「記憶に殺されると
思いながら過ごす夜が
何度もあっても、
心は回復したいと
思っていること。
どんな人も回復する力を
持っていること。
あなたの中の回復する力に、
あなた自身が気づいてあげて
ほしい、側にいてあげてほしい
ということ」

さまざまな出会いによって、
ありのままの「自分」で
生きようとしている、
しょうこがいる。

○みほ_2014.8.4 miyagi
26才のみほは
職業訓練の経て、
大型特殊免許を取得し、
建築業として
現場に出て働いている。

車両系建機、不整地運搬車、
解体用、小型移動式クレーン、
フォークリフト、高所作業車、
玉掛けなど、免許も資格も
たくさん取った。

重機に触る機会は
今は少ないけど、
図面作ったり、
事務作業だって楽しい。

「女の子らしい仕事じゃないと
ころにやりがいを感じる。
やったらやった分だけ、
返ってくるしね」。

震災後の出会いが、
見つけた仕事が、
自分の生き甲斐とさえ
感じられる。

○Teresa_2013.4.13 tokyo
「ピエロになりたい。ってゆーか、
ピエロみたいでしょ私」

16才のテレサからのメール。
自分をピエロというのは
どうしてなのか、
気になった。

「ニコニコしてるから最近、毎日。
どの時間でも笑ってると
みんな幸せになるよね。
作り笑いはしんどいねって？
慣れたら平気。つらくない。
笑うのって楽しいです」

そして、何回かやりとりを
続けた最後のテレサからの言葉。

「渋谷 恋しい。」

渋谷で会ったときは、
テレサではなく違う名前を
名乗っていた彼女。
今さえあればいいって
自分に言い聞かせているようで、
私には刹那的に映った。

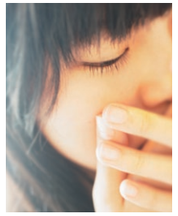
「本名を忘れそう。
もう本名は使わなくても
いいかな。
新しい自分ができているから。
昔の自分は捨ててもいいかな。
今が楽しいから…」

ね、テレサちゃん。
今度、会うときは
笑っていないあなたにも
会いたいよ。

○Shoko_2014.4.28 tokyo

さしのべられてる手をつかめば
助けてもらえるかもしれないし、
そこからさらに人との出逢いが
あって、人生の選択肢が増える
のかなー」

あの日、あの時、あの場で
出逢えたことを、
ミホと２人…いつか懐かく
思える日がきますように。
そんな日がくるまで、これからも
一緒にジグザグ歩いていこうね。



○iku_2012.11.10 tokyo
自分の気持ちを大切な人に
伝えるのって勇気のいること。
わかってもらえるか
不安になって、
17才のikuも伝えることが
出来ずにいた。

「彼に今までのこと、自分のこと、
すべては話せなかったけど、
病気のこと、学校のこと、
今の心のこと、将来のこと、
色々、話せました。」

夢も広がる。
料理を勉強したり、
原付免許取って、自分で行動
できるようになりたい。
大好きな彼に自分の気持ちを
伝えられて
「今、これで一緒にいられる」って
思った。
ただ大切だからこそ、
失うことが恐くなってしまった。

「今度は、駄目になるのがこわい、
想われなくなったらどうしよう」。

それでも、ikuは自分の問題と
これから向き合っていかなきゃ
と思っている。
一緒に生きていきたいと
思う人がいる。
独りじゃないって思えたとき、
人は強くなれるんだね。

○MIHO_2012.1.8 niigata
17才のミホは人見知り。
「ウチといて苛々しませんか？
つまんなくないですか？」が、
口ぐせ。
私が何度も
「しないよ、つまんなくないよ」。
そう言ってるのに、
頑なに首を横に振るミホ。
自分がキライ。
イヤでもNo! が言えない。
それなのに行動的なミホ。

ミホと出会ったあの日、
悔しさと哀しみと無力感で
いっぱいになった私。
忘れられない出来事。
忘れてはいけない気持ち。
私よりキツかったはずのミホ。
それでもミホは立ち上がり、
前を向こうと歩き始めた。

「誰かに相談するって最初、
勇気がいるけど、

ここが落ち着ける場所であって
ほしいな。

○みひろ_2010
自分でいると、
壊れてしまいそうで…

私はもう一人の「わたし」を
作りあげた。

「わたし」になれば、
嘘のセックスをすることが
できる。

恋愛じゃなくて、
仕事のセックスをして、
存在を知ってもらうことを
選んだの。
たとえ大切なものを失ったと
しても…
このままじゃ道はどこにも
つながっていないって、
わかっていたから。

だからね、犠牲にして
泣いたぶんだけ、
みんなの前では笑ってる顔を
見せるよ。

もう一人の私が
壊れてしまわないように…。

○真_2011
『2年前より顔つきが優しく
なったなー』。
母親になった真を見たときの
第一印象。
「ママーママ」と、
甘えて求めてくる我が子に

いつの頃からか、
姿は見えないけど、
声が聞こえるようになった。
「わたしはここにいる。
わたしにきづいて…」
その声は賑わう街の中で、
パソコンや携帯の電波を
通じて…。

「わたしの心は空洞だから
透けて見えるでしょ？」

色と音…声を失った透明で
今にも消えそうなキミは、
自分の存在を否定して
生きている証。

見つけたよ。

ねぇ、キミの隣にいってもいい？

○奈都子_2010
なっちゃんに聞いたことがある。
「ホッとする場所ある？」
「うーん、高校生のときから
ずっと探しているかも(笑)」

素直になれる場所。
吐き出せる場所。

「周りからのイメージを
崩せなくて、
本当の自分の気持ちが
よくわからないときがある」

自分がどこにいるのか、
わからない
彼女が辿り着いた先は…ここ。

私たちのとなりで
一緒に疾っている、なっちゃん。

なっちゃんの未来は限りない。

一瞬でもいい。

つられて立ち上がると、
“チェッ、仕方ないな”とでも
言いたげに上目遣いで
私を見る。

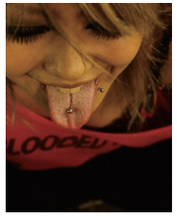
ほたるのこういう仕草が
たまらなく好きだ。

「面倒クセェ」って表情で、
言葉や態度は冷たいけれど、
実は優しくって相手の気持ちを
受け入れちゃう情の深さを
感じる顔。
彼女の心に触れると、
その柔らかさに触れたくて、
また会いたくなる。

癖になってしまうんだから…
なんだか本当に猫みたいな
女の子だ。

○佐津川愛美_2010

変わっていないのは、
のん担の笑顔と場の雰囲気を
大切にするところ。
可愛さはそのまま、
大人の女性になっていた。



○2009
いつも決まった場所に
いるとは限らない、

路上に住む気まぐれな猫…。
ほたるはそんな女の子だ。
「あっーお腹すいた。
コンビニでも行くかっ」
ほたるが急に立ち上がったので、

「いつ　死んでもおかしくない」
と、医者に言われたと話す。

よしえの好きなフレーズがある。

『なぜ　生きているの？

なぜ　生きていくの？
何もないから
何かになりたい…』

“何か”になるために
歩むべき道を探している。

○2008
アキバで
ストリートパフォーマンス
しているユニット『FICE』。
FICEのライブには
“なくてはならない存在”がいる。
踊るアキバ系の男たち、
通称“ヲタ芸”。

「死ぬ時は、みんな一緒だよー」

歌い踊り続けるFICEが叫ぶと、
ヲタ芸のボルテージも
ヒートアップ。
そこあるのは
“一緒に生きているよ”という
一体感。F
ICEとじゃなければ
味わえない感覚なんだろう。

見る人を元気にさせる
FICEって、スゴすぎる。

○2008
のん担と初めて会ったのは
VOICES 3号の特集での
撮影の日。
マンバと呼ばれる個性的な
メイクをするサークルの中に
彼女はいた。

あれから2年。
10代だったのん担も
“大人”になった。
メイクやファッション、
喋り方が変わった。
環境が変わっていた。

○2006
優子21歳。インディーズロック
バンドのボーカリスト。
池袋を徘徊してた元援交少女
というプロフィール。
そんな彼女に会いたくて、
会いたくて、ライブに行った。

真実が知りたい。
真実を求めたい。
真実をつかみたい。
真実を伝えたい。

スポットライトを浴びながら、
歌う優子。
「お手軽でテキトーな自由」
だった過去と
「ホンモノっぽい自由」の今。
自分の心の声に
正直に生きてる優子が、
眩しかった。

○2007
17歳になったばかりの彼女と
別れ際、約束をした。
「また会えるよね。
会えなくなるなんて、ないよね？
そんな時は、連絡ちょうだいよ」
彼女は、少しだけ笑った。
それから30日後、前に起こした
傷害事件をきっかけに、
彼女が捕まった。
二度目の少年院送り。
会った時に、一年後の自分を
語ってくれた彼女。
「今と変わらず、
仲間と笑っていたい…」

夢と現実の間で揺れながら、
少女はひとり塀の中。
17歳…それぞれの青春。
その一瞬は長く、短い。

○2007
“小さな病気”を
いくつも抱えている、よしえ。

人格障害、リストカット、
オーバードーズ、
向精神薬やお酒への依存、
自律神経失調症など…。

○2006
自分らしい制服姿で、
中学の卒業式を迎えた。
桜の花弁が舞う頃には、
彼女たちも高校生。
過去でもなく、
未来でもなく、
少女でもなく、
大人でもない。
「今」の彼女たちを刻みたかった。

「高校ぁ疲れますね…
厨坊みたいにわ、いかないんで。
まさみ、かな、なみ、しおり15歳
…厨坊☆最後の思い出が
できました。
めっちゃ嬉しかったです♪♪」

○2006
みぃとまちゃは
サークルで出会い、恋に落ちた。
付き合って1週間で、
一緒に暮らし始めた。
暮らし始めて1ヵ月で、
結婚を意識した。
「うちらって運命だったよね。
食べ物も趣味も聴く曲も
メチャ合うんだ。
こんなのってないよね。
いくら探しても出会えないよね」
デートの過ごし方はランド、
渋谷センター街、日サロに
行ったり、プリ撮ったり、
トラパラ踊ったり…。

ふたり、一緒なら
退屈なんてない。
みぃ18歳、まちゃ20歳の夏物語
はまだまだ続く。